久しく御ご伺ひのみ致し
居り寛々申訳なき儀也 難波江
の春老いかばかりか長閑なるも
の有ん哉 兄の御健康はいかよ
兄の御加平はいかがなり 愁思
はいかゝあはれ御霊の暇を拝も
あらば御作と共に申し賜
はれや
小生は例よりて加平と塊のみ
毎日しやく乗らぬしだい
の奴とやりて何の取えもなく暮

毎日しやく氏に一ヶ月ぬしいと
の如と手て何の取えもおく暮
し居て時なたまの暇ハは古
賢人の文籍きて有難き故
訓ハ接する毎ハ敷あれ之れさへ
日ハ増しに発力の減滅致
しかくやうさ有るハ地しれし
あはれハなハ少しハ尋常行
路の人と異ものあるやうとの心軽ハ
あれ志の脉れらくよりハ見も覚
事おきなやと心掛き毎のみ
有て我

同人ハ例こよりて録に辛たり
起縄高一たり思の如く賢の如く
まづ恐らく為ニ近しと申す
本至當と仕らんかハ生おどハ

芸術
まづ恐らく茅右衛門近しとやす
林至富と佐らんかゆ生おどは
依然たる旧阿蒙、酒は丸麦ら
ゆりんりたるものゆ扶元日第一蒲
東京と酒と一日は過して大気
焔のレースおおして以来憤れた
る愚俗の徒が女性の瞳ゆよ
眉はれて逢見ての後の心はと
吐はぎ居りる乃公は超然と
して長夜の宴ゆ扶君おく誰も
おし何所かが適帰せんと云ふ
有様まて嘯ゆる間く獨歩氏
が高しく歩中但し近来は
少く酒の中毒こしてやられたる
ゆうおる気味ゆて大ふぎゆ
扶
実は「哀調」の評論は悪くあ

小説「河内山」等にあらはれたる気味

よりおる気味

我

実は「哀調」の評論は悪くあつめて見の所に送らんとなほひしがいくはは恨は黄「恨」千万

大に賛意を表したる者はれ生の知る限りでは「太陽」（即興詩人、平家つくしとを並べて去年の三流文といふ一長所）「三六新聞」也評

論は大に感謝の價値あり何とおれば見が伏若し発音とふるくものあらんとなせらるれば「中央公論」（之は

時美子ドン）「早稲田文学」稲田学士

知己の言れるを所しと思ひたし

いがいが、呂蛙落ある論は

おもしものよ「文庫」向り如是文

壇の考慮（他にもたる理あり也

知己の言れるように
はがいかゞ、呂洛おる浴治は
おちしものゝ文庫向り始文
壇の所漢（他ともたる理ありや也
の如きは近日きたやり出めかと覚
悟いたし居るゝ（は言ふ所はしむゝ如か
す、ゝ「お天地」も（の評も）賛辞あり
しと祝賀いたし居りゝ
家としてその消息の近来何ぞ
早ちおるや好漢十年

中澤臨川書簡　宛

本間文庫
文庫 14
C110